



Title	類似する方言間のスタイルシフトの分析：ある西日本内移住経験者を例に
Author(s)	田中，穂乃香
Citation	阪大社会言語学研究ノート．2023，19， p. 110-133
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/92436
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

類似する方言間のスタイルシフトの分析

—ある西日本内移住経験者を例に—

田中 穂乃香

【要旨】

本論文では、香川県で生育したあと、広島・岡山での居住を経て、現在福岡県に住んでいる50代のインフォーマント1人を対象に、日常生活で行っている母方言・移住先方言・標準語のスタイルシフトを観察し、動機を考察した。具体的には、インフォーマントが友人や親族と電話で会話する音声を録音し、14の言語項目においてインフォーマントと会話相手がどのような言語形式を選択したかを観察し、その動機を考察した。

その結果、インフォーマントは基本的に「高松市方言でも福岡市方言でも使用される形式をベースとする西日本広域方言」を基調として用い、スタイルシフトはあまりしないこと、ただし標準語話者に対してシフトしようとする傾向があることが分かった。また、過去に居住していた岡山の人と話す際にわずかに岡山市方言を用いたほか、北海道出身者に対して福岡市方言の特徴的表現をわずかに用いた。シフトした／しようとした項目は分析対象とした14項目中10項目であり、シフトの動機は、アコモデーション・わきまえ・アイデンティティ表出が考えられた。

【キーワード】スタイルシフト、西日本、方言、移住、アコモデーション、わきまえ

1. はじめに

近年、人口移動の活発化に伴い、仕事、進学、結婚などを理由に一生のうちで複数回、県境を越えた移住をする人は少なくない。そしてそれらの人たちは、標準語のほか、移住先で使用される方言を習得し、使い分けることがある。移住経験がある筆者自身¹⁾もそのような使い分けを行っているが、同じく移住経験のある家族の会話においても、(1)の例のように、会話相手によって母方言・移住先方言・標準語を切り替えている様子が観察できる。(1)は、本研究の調査協力者Xの発話例である（話者情報については3節を参照）。

- (1) a. そうダよ（対北海道出身者）
- b. 嫌ジャなあとと思って（対岡山県出身者）
- c. これからヤな（対香川県出身者）

もっとも、この話者の場合、言語的に大きな違いがない地域のあいだで移住を行っており、方言を切り替えずとも伝えたい意図を会話相手に伝えることができるはずである。にもかかわらず、母方言・移住先方言・標準語を切り替えて話すのはなぜであろうか。

本論文では、方言間の差が比較的小さい西日本内で3回の移住経験を持つ1人のイン

1) 筆者は1999年生まれ、女性。居住歴は次のとおり。0～2歳：岡山市、2～18歳：福岡市、18～20歳：大阪府池田市、20歳～現在：福岡市。

フォーマントを対象に、親しい人物と会話する際、母方言・移住先方言、あるいは方言・標準語をどのように切り替えるのか・あるいは切り替えないのかを観察し、インフォーマントの中で複数の方言と標準語がどのように運用されているのかを分析する。

以下、本論文では、2 節で先行研究と問題のありかを整理したあと、3 節で調査概要と分析方法を述べる。続く 4 節で、談話資料を用いて言語項目ごとにインフォーマントのスタイルシフトの実態を分析して整理し、5 節で会話相手のタイプごとにスタイルシフトの状況と動機をまとめる。6 節に考察、7 節にまとめと今後の課題を示す。

2. 先行研究と問題のありか

本節では、先行研究を整理するとともに、問題のありかを指摘する。具体的には、2.1 節でスタイルシフトに関する先行研究を検討し、2.2 節で本論文の問題のありかを述べる。

2.1. スタイルシフトの先行研究

方言間スタイルシフトの前提は、母方言に加え、第二・第三の方言を習得していることである。以下、これまでの研究でどのようなことが明らかになっているかを概観する。

温井（1997）は、奈良県十津川村出身で、奈良県北中部で生活する 19～25 歳の 50 人に、移住による言語変容が表れると思われる表現法など 34 項目について調査した。人々は移住によって移住先の言語形式を身に付け、状況により使い分けていると述べている。

ロング（1990）は、大阪と京都で生活する他地方出身者の方言受容を研究した。大阪・京都で生活する、他地方で生まれ育った大学生に調査したところ、大阪または京都の方言の約 3 割を正確に受容したことが分かった。大阪と京都での差・男女差はあるものの、「シンDOI」「アカン」「～チャウカ」「ホンマ」などが多くの人に受容されている。自分の言葉を変えようとする意識よりも、相手の言葉に合わせようとする意識が方言受容につながるとするのがその結論である。

宇田（2017）は、広島県福山市出身、静岡県浜松市在住の一人のインフォーマントを対象に、母方言・移住先方言・標準語のスタイルシフトを研究した。その結果、インフォーマントが、アコモデーションによって相手の使用する形式に合わせて自らが使用する形式を切り替えていたこと、わきまえによって方言を過剰使用する場合があること、自身が使用していない形式で相手が話した場合は切り替えが難しい場合があること、トピックによっては母方言話者でない相手との会話でも母方言が出現することなどを指摘した。また、インフォーマントの頭の中では、母方言・移住先方言・標準語は重なり合う共通部分を持つ体系としてストックされ、標準語は移住先方言（浜松方言）の一部としてそのすべてを浜松方言と共有していることが明らかになった。

上林（2019）は、首都圏に移住した関西若年層 3 人が出身地域の異なる親しい友人との談話においてどのようにスタイルを運用するのか考察した。おおむね他郷の友人に対しては標準語、同郷の友人に対しては方言を用いているという結果であった。その動機について、上林（2019:138）は「わきまえ的な動機と、標準語スタイルへのスイッチがさほど苦ではないという意識が噛み合」った結果だと分析している。ただし、相手によって使用

スタイルを切り替える（他郷の相手に標準語を使用する）人と、相手によってスタイルを切り替えつつも、部分的にアイデンティティを示すために言語資源を活用する（他郷の相手には標準語を用いることを基本としながら関西の話題では関西の方言を使用する）人がいることが明らかになった。

2.2. 問題のありか

2.1 節で見てきたように、場面や会話相手によることばの切り替えに関する意識調査や、方言―標準語間の切り替えの実態に関する調査は行われてきたものの、言語的・地理的距離の近い範囲内、すなわち第二・第三方言を習得・使用せずとも意思疎通が可能な範囲内、特に西日本内での移住を経験した人を対象とする実態調査は例が少ない。

本論文では、類似する方言が使用される西日本内で複数回の移住を経験した1人の話者の、方言間スタイルシフト・方言―標準語間スタイルシフトの実態を明らかにすることを目指し、問題のありかを以下のように設定する。

- (a) 類似する複数の西日本方言と標準語を知識として持っているインフォーマントが親しい人物と会話する際、誰に対して、どのように方言―方言、方言―標準語をスタイルシフトさせるのか、あるいはスタイルシフトさせないのか。具体的には、
 - (a-1) 言語項目の特徴：インフォーマントは、会話のなかでどのような言語項目をスタイルシフトさせているか。また、シフトが予想されるにもかかわらずシフトさせない項目はあるか。その項目をスタイルシフトさせる／させないのはなぜか。
 - (a-2) 会話相手の特徴：インフォーマントは、会話相手に対して、(a-1) で明らかにしたスタイルシフトをどのように行うのか／行わないのか。それはなぜか。
 - (b) 上の (a) の結果を踏まえれば、インフォーマントは、総体として、どのような動機でスタイルシフトさせる／させないのか。
 - (c) 上の (a) や (b) の中で、とくに、使用される方言の類似する西日本内部で移住を行った話者に特徴的な事象はなにか。
- 以上の点に注目し、(a-1) については4節で、(a-2) については5節で分析し、(b) と(c) については6節で考察する。

3. 調査の概要と分析方法

まず本論文における用語の定義をまとめ、続いて調査の概要と分析方法を述べる。

3.1. 本論文で使用する用語の定義

高木（2006）、宇佐美（2015）、宇田（2017）、松丸（2010）などの先行研究を踏まえ、本論文では、「方言」「標準語」「スタイル」「スタイルシフト」を以下のように定義する。なお、方言や標準語は「言語体系」のバリエーションと捉えられる場合が多いが、本論文では個別の語彙・語形を分析対象とする。

《方言》：地域によって異なる言語要素を含む言語体系、およびそれぞれの地域的な語形。

《標準語》：全国共通の言語要素で構成される言語体系および語形。学校教育やマスメディアなどにより日本全国の人々が理解することのできる言語体系および語形。

《スタイル》：一人の人物が場面・状況などによって使い分けることば。

《スタイルシフト》：一人の人物が会話相手・場面・状況・話題などによって自らのスタイルを切り替えること。

また、4 節以下において X が行ったスタイルシフトの動機を分析する際に、「デフォルト」「アコモデーション」「わきまえ」「アイデンティティの表出」という用語を使用する。これらについてもあわせて、ここで定義しておく。「アコモデーション」「わきまえ」については、上林（2019）、井出（2006）を参照した。

《デフォルト》：結論を先取りするが、X は、さまざまな会話相手に対して、自身の居住歴のある高松市や福岡市をはじめ、西日本方言で広く使用される方言形式を、スタイルシフトせずに（すべての会話相手にほぼ同じ程度で）使用している。本論文ではこのような、西日本共通語的な形式を汎用することを、《デフォルト》のスタイル選択とする。

《アコモデーション》：話し手が、会話相手が実際に使用している言語形式（例えば方言や標準語）によって自分のことばを調節し、心理的距離を調整する。

《わきまえ》：社会的な場面、あるいは、相手の出身地・居住地を基に（相手の実際の使用言語形式に関わらず）、自身が使用することばを区別する。

《アイデンティティの表出》：自らが、ある土地と関わりがあることを示すためにその土地に特徴的な方言を使用する。例えば、自らが福岡市居住者であることを強調するために、相手の出身・居住地・使用方言に関わらず福岡市方言を使用する等である。

なお、この4つの動機のうち、「アコモデーション」、「わきまえ」、「アイデンティティ表出」の3つは（半ば無意識的にであれ）戦略的に言語形式が選択されているケースだと思われる。しかし「デフォルト」については、戦略というよりも自然体で話しているときにそのような言語形式が無意識的に選択されるといった性質のもので、その点「動機」と呼ぶにはふさわしくないかもしれない。

3.2. インフォーマントについて

3.2.1 節でインフォーマントの居住歴、3.2.2 節でインフォーマントの言語生活と意識をまとめる。

3.2.1. 居住歴

インフォーマントは福岡県福岡市に住む X（1970 年生まれ、女性、調査時 51 歳）である。居住歴および各地域の特徴は表 1 の通り。X は現在、夫（1970 年生まれ、男性、0～18 歳：岡山県倉敷市、18～22 歳：大阪府吹田市、22～29 歳：岡山県倉敷市、29～31 歳：岡山市、31 歳～現在：福岡市）、娘（1999 年生まれ、女性、0～2 歳：岡山市、2～18 歳：福岡市、18

類似する方言間のスタイルシフトの分析

～20 歳：大阪府池田市、20 歳～現在：福岡市）と同居している。なお、X はアナウンススクールに通った経験があり、標準語を習得している。

表1 インフォーマント X の居住歴

居住時年齢	居住地	左記地域の地理状況および方言の概要 ²⁾
0～18 歳	香川県高松市	県央にあり瀬戸内海に面した港湾都市で県庁所在地。四国の玄関口で海上・陸上交通の要地。乙武（2019）によるとこの地域の方言は東讃方言（X は讃岐弁と呼んでいる）。
18～19 歳	広島市	県南西部にあり広島湾に面した市で県庁所在地。小西（2017）によるとこの地域の方言は安芸方言（X は広島弁と呼んでいる）。
19～31 歳	岡山市	県南にあり県庁所在地。中四国地方の交通の要地。小畠（2017）によるとこの地域の方言は備前方言（X は岡山弁と呼んでいる）。
31 歳～現在 (51 歳)	福岡市	県北西部にあり博多湾に面した市で県庁所在地。九州の交通の要地。平塚（2014）によるとこの地域の方言は筑前方言（X は博多弁と呼んでいる）。

3.2.2. 言語生活と言語意識

ここで、4 節以下で X のスタイルシフトを分析する際の参考情報となる、X の言語使用意識をまとめておく（表 2）。表中の方言名は X が回答した結果をそのまま記す。X の内省によれば、夫との会話で、強い主張（主に怒りの感情）を伝える際には讃岐弁になる場合があるという。以前、X は夫の母親（義母）と元職場の上司に「讃岐弁はキツイイメージがある」と言われた後、日常生活で意識して讃岐弁をあまり話さないようになった。

表2 インフォーマント X の主な言語生活

会話相手	会話頻度	会話相手に対して X が使用する方言
夫（同居）	毎日	岡山県の方言＋博多弁。強い主張の際には讃岐弁
娘（同居）	毎日	博多弁
同僚	平日	博多弁
実父	週 1 回	讃岐弁

表3 インフォーマント X の居住歴と言語意識

年齢	居住地	地域方言	言語意識
0～18 歳	香川県高松市	讃岐弁	大変好きだが現在自分が話しているのはエセだと思う。
18～19 歳	広島市	広島弁	自然に話せない。アクセントが難しい。相手が広島弁なら可能かもしれないが自分が話すのはエセだと思う。
19～31 歳	岡山市	岡山弁	自分が話せるか分からない。嫁ぎ先の倉敷市の方言話者と話すときは倉敷市方言を話せる。
31 歳～現在	福岡市	博多弁	仕事で相手との心的距離を縮めるため使用。生粋の博多弁は分からないので自分が話すのはエセだと思う。
		標準語	主に相手の出身地が分からない場合に用いる。

2) 『日本大百科全書』、『デジタル大辞泉』等によった。

X の居住歴と母方言・移住先方言・標準語に対する意識は表 3 にまとめた。表中の「地域方言」とは、X が「居住地」記載の地域で使用されていると思っている方言である。

3.3. 調査方法

本論文では、1 人の方言話者が異なる会話相手と交わすカジュアルな会話場面でのスタイルシフトの実態と動機を明らかにすることを目的とする。X 自身にカジュアルに会話できる相手を選んでもらい、調査への同意を得て、電話で行った会話を録音した。録音の際、筆者は同席しなかった。談話データは表 4 の通りである。なお表中の会話相手のコードは出身地の道県頭文字のアルファベット・性別（F=女性、M=男性）・年齢層（M=中年層、0=高年層）の順に記載した。「会話相手」の欄には X からみた会話相手との関係性と会話相手の年齢、「当時の年齢」の欄には X と会話相手が知り合った当時の X の年齢を記している。X は HFM、OFM①、KFM と SNS で頻繁に連絡を取り合っている。OFM②とは年数回連絡を取り合っている。KMO とは、先に表 2 で示した通り、週 1 回電話で話している。

表 4 談話データについて

録音日	会話相手	録音時間	当時の年齢	会話相手の居住歴
2021/7/20	HFM 実弟の妻 48 歳	1 時間 59 秒	39	0～15 歳 北海道札幌市 15～18 歳 北海道釧路市 18～37 歳 札幌市 37 歳～現在 神奈川県横浜市
2021/7/20	OFM① 大学時代の友人 50 歳	43 分 51 秒	21	0～2 歳 岡山県倉敷市 2～26 歳 岡山県総社市 26～27 歳 岡山市 27～32 歳 大阪府高槻市 32 歳～現在 総社市
2021/8/24	OFM② 友人 53 歳	25 分	25	0～30 歳 岡山市（旧御津郡） 30～35 歳 大阪府豊中市 35 歳～現在 岡山市
2021/7/25	KFM 高校時代の友人 51 歳	1 時間 4 分 51 秒	15	0～18 歳 香川県さぬき市（旧大川郡） 18～20 歳 広島市 20～22 歳 広島県東広島市 22～25 歳 香川県坂出市 25～28 歳 香川県さぬき市 28 歳～現在 広島市
2021/8/26	KMO 実父 76 歳	42 分 47 秒	—	0 歳～現在 香川県高松市

3.4. 分析方法

談話で実際に用いられた言語形式について、どの項目でどのような切り替えがなされたか（あるいはなされなかったか）分析する。5 種類の談話資料について、それぞれ会話開始から 25 分間を文字化してことばの使用の特徴を分析した。分析項目については、4.1 節の

表 5 にまとめて示す。分析項目の選定にあたっては、ロング (1990)、温井 (1997)、高木 (2006)、宇田 (2017)、上林 (2019) を参考にし、談話データを観察しながら、インフォーマント X が居住した地域によってバリエーションのある項目やスタイルシフトが観察されることが予想される項目を選んだ。

4. 言語項目ごとの分析

本節では、2.2 節で問題のありかとしてあげた、次の (a-1) の問題を分析する。

(a-1) インフォーマントは、会話の中で、どのような言語項目をスタイルシフトさせているのか。また、シフトが予想されるにもかかわらずシフトさせない項目があるのか。その項目をスタイルシフトさせる／させないのはなぜか。

最初に、4.1 節で分析項目を整理し結果を概観したあと、4.2 節で X が会話相手によって形式を切り替えた項目、4.3 節で会話相手によって大きく切り替えたとは言いえないが変化が観察された項目、4.4 節で会話相手による切り替えが見られなかった項目の順で調査結果をまとめる。4.5 節で 4.2 節～4.4 節の結果を整理する。

4.1. 分析項目および結果の概観

分析項目は、表 5 に挙げた項目の他、副詞、順接の接続詞、断定辞＋接続助詞、ノダ文の疑問文の文末形式を加えた 14 項目である³⁾。表 5 には分析対象項目の一部および各項目の標準語、岡山市方言 (岡山弁)、広島市方言 (広島弁)、高松市方言 (讃岐弁)、福岡市方言 (博多弁) の相当表現を示した。アスペクト形式、動詞否定辞、推量形式 (動詞述語) については「スル」、文末断定辞 (形容名詞)、推量形式 (形容名詞) については「静かダ」、推量形式 (名詞述語) については「学生ダ」の形式で代表させている。『方言文法全国地図』第 1 集～第 6 集 (1989 年～2006 年)、平塚 (2014)、小畠 (2017)、乙武 (2019) を参照して作成している。なお、『方言文法全国地図』のみが出典の項目 (間投助詞、原因・理由の接続詞と接続助詞、逆接の接続詞と接続助詞、否定の形容詞) については、調査地点に高松市がないため、高松市近郊の綾歌郡国分寺町と現さぬき市寒川町の結果を示す。

本論文では、X が方言一方言、方言一標準語を切り替えた理由が、〈1〉会話相手が実際に使用した言語形式であること (アコモデーション)、〈2〉会話相手の出身地あるいは居住地で広く使用されている言語形式であること (わきまえ)、〈3〉その他、のどれに起因するかを調べるために、会話相手の使用した言語形式もあわせて分析した。また、表 5 の項目以外にも、方言に起因するかは不明だが、会話相手によってスタイルシフトが見られたものも分析対象としている。例えば「デ」「ンデ」「ホンデ」「ホイデ」のバリエーションが見られた順接の接続詞などである。

3) 岡山・広島・高松・福岡における各対応形式を確認できなかったため、この 4 項目については表 5 に記載しなかった。

表5 分析項目（一部を除く）

	標準語	岡山市	広島市	高松市	福岡市
① X が会話相手によって切り替えた項目					
間投助詞	ー	ノー	ノー	ナー・ノー	ナー・クサ
アスペクト （進行）※1	シテル シテイル	シトル	シヨル		
			シトル		
		ショール		シヨル ショール	シヨー
アスペクト （結果）		シトル			
		シテシモータ	シトー		
② X が会話相手によって大きく切り替えたとは言えないが変化が観察された項目					
動詞否定辞	ナイ	ン ラン			
文末断定辞 （形容名詞）	静かダ	静かな・静かジャ		静かジャ 静かな※2	静かヤ 静かカ
原因理由の 接続助詞	カラ	ケエ		ケン	
		カラ		ケニ	
推量形式 （動詞）	スルダロー	スルジャロー シヨー・シヨー	スルジャロー	スルジャロー スルダロー セルダロー	スルジャロー スルヤロー シヨー・シヨー
推量形式 （形容名詞）	静かダロー	静かダロー			
		静かジャロー	静かニアロー		静かヤロー
推量形式 （名詞述語）	学生ダロー	学生ジャロー 学生ダロー 学生ヤロー			
③ X が会話相手によって切り替えなかった項目					
否定の 形容詞	ナイ	ネエ	ナア	ナイ	ナカ
原因理由の 接続詞	ダカラ	ジャカラ セエジャカラ	ジャケエ ホイジャケエ	ダケン	
				※3	
逆接続助詞	ダケド	ジャケエド セエジャケエド	ジャガ ホイジャガ	ダケド ホンダケド※4	ダバッテンガ
逆接の 接続助詞	ケレドモ	ケエド		ケド	バッテンガ
		ガ			

※1：工藤（1998）、岡（2018）から、どの地域も動詞によってはアスペクト（進行）で「トル」の使用可。
 ※2：X の内省では「シズカヤ」も使用。 ※3：ホンダカラ／ジャカラ／ダカラ／ホンダケン／ジャケン
 ※4：ほかに、ジャケド／ダケンド／ホンダケンド／ジャケンド

表5では、分析項目を、X が会話相手によってスタイルシフトしたか否かによって、以下の3つのグループにわけて整理している（具体的な使用数は4.2節以下参照）。

- ① X が会話相手によって使用する形式をほぼ明確に切り替えた項目
- ② X が会話相手によって大きく切り替えたとは言えないが、一部の形式の使用度に若干の変化が観察された項目
- ③ X が会話相手によっては切り替えなかった項目（すべての会話相手に同じ形式を使用した項目）

①は会話相手によってX が最も多く使用した形式が異なる項目、②はX が最も多く使用する形式を会話相手によって切り替えることはなかったが、他の話者に使用しなかった形

式が 1 例以上見られた項目や他の話者にはあまり用いなかった形式の使用率が上がった項目である。たとえば、4.2.1 節の間投助詞では、X は対 HFM 場面では「ネ」、対 OFM①場面・対 OFM②場面・対 KMO 場面では「サ」、対 KFM 場面では「ナ」を最も多く使用した。このように会話相手により X が最も多く使用する形式を切り替えているものを①とした。一方、4.3.1 節の動詞否定辞では、X はどの会話相手にも「ン」を最も多く用いるが、対 OFM①場面では対他の話者より「ナイ」の使用率が上がる。このように最も多く使用する形式は概ね同じだが詳細に分析すると変化が見られる項目を②とした。表 5 の太字部分は X が 1 度以上使用した形式である。

以下、4.2～4.4 節で、上の言語項目ごとにその結果を見ていく。各言語項目の結果を提示するにあたっては、最初に各形式の使用数を示した表、続いてその結果の概要と形式選択の動機を示した表の順に 2 つの表を示す。そのうち前者の表においては、最も使用数が多い形式を**太字ゴシック体**で、2 番目に多い形式を**太字下線**で示す。なお、先に 3.1 節で、本論で使用する用語のうち《デフォルト》を定義して述べたように、X は、さまざまな会話相手に対して、居住歴のある高松市や福岡市をはじめ西日本方言で広く使用される方言形式を、スタイルシフトせずに使用している。以下の分析においては、このデフォルトの使用からのずれを中心にして見ていくことにする。具体的には、デフォルトの形式からいかに逸脱したかに注目し、4.2 節に X が会話相手により切り替えた項目、4.3 節に大きく切り替えたとは言えないが変化が観察された項目をまとめる。4.4 節にデフォルトの形式から逸脱せず切り替えなかった項目をまとめる。

4.2. X が会話相手によって切り替えた項目（表 5 の①）

まず、X が会話相手によって切り替えた項目は、間投助詞、副詞、アスペクト形式である。以下、順にその結果を示す。

4.2.1. 間投助詞

表 6 に間投助詞の使用数を示す。結果から「サ」に注目すると、数の多少はあれど、すべての会話相手に対して使用されていることがわかる。ここから、X が「サ」をデフォルトの形式として普段からよく用いていることが推測できる。

表 6 間投助詞の使用状況

場面	対 HFM		対 OFM①		対 OFM②		対 KFM		対 KMO	
話者	X	HFM	X	OFM①	X	OFM②	X	KFM	X	KMO
ナ	0	0	1	3	<u>16</u>	12	18	14	<u>16</u>	48
ノ	0	0	0	0	0	0	0	1	2	<u>8</u>
ネ	41	20	<u>24</u>	18	9	<u>8</u>	4	14	0	0
サ	<u>21</u>	0	26	<u>5</u>	22	1	<u>7</u>	1	34	0
ヨ	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0

また相手別では、HFM との会話では「ネ」を、OFM①との会話では「ネ」と「サ」を多用している。また OFM②に対しては「サ」と「ナ」を、KFM に対しては「ナ」をよく使っている。KMO に対しては「サ」が最も多く、「ナ」がこれに続いている。「ネ」はまったく使われない。

HFM に対して「ネ」を多用しているのは、会話相手である HFM の使用する間投助詞に合わせたためと考えられる。HFM は X に対して「ネ」しか使用しておらず、他の間投助詞は用いていない。X が「サ」をデフォルトの形式として用いることをふまえると、対 HFM 場面における「ネ」の多用は、アコモデーションによるものと考えられる。OFM①に対する「ネ」の多用、OFM②・KMO に対しての「ナ」の多用なども、同様にアコモデーションに起因する形式選択であると考えられる。

一方、KFM に対する X の「ナ」の使用については、2 つのことが考えられる。1 つはアコモデーションで、これは KFM が「ナ」をよく用いていることから導かれる。しかし、KFM が「ナ」のほかに「ネ」も同じ程度使用しているのに対して、X による「ネ」の使用は少ない。これは「ナ」の使用が「わきまえ」に起因する可能性を示唆するものである。先の表 5 に示したとおり、高松市方言の間投助詞は「ナ」である。X の中にこの、高松市方言の間投助詞は「ナ」であるという知識があり、KFM が香川出身であることから「ナ」を（KFM よりも多く）用いたと考えられるのである⁴⁾。

ここまで述べてきた結果の概要と各形式の選択動機をまとめて表 7 に示す。表中、「結果概要」欄に記載のある形式使用の動機を「動機」欄の同じ行に示している。また、「動機」欄に「1、2」といった数字が記載されている場合には、そのいずれかあるいは両方が動機だと思われることを示す（以下、結果概要と形式選択の動機を示す表についてはいずれも同様）。

以下、他の項目についても同様に、使用状況を先に示し、それをふまえて結果の概要と各形式の選択動機を整理して述べる。選択動機を「アコモデーション」とした箇所はいずれも、話し相手の使用形式との一致・類似に基づく判断である。「わきまえ」とするのは、話し相手の実際の使用形式ではなく、相手にまつわる情報にしたがった形式選択と判断される場合である。

表 7 間投助詞における X の結果概要および形式選択の動機

会話相手	結果概要	動機
HFM	「ネ」を最も多く使用。	アコモデーション
OFM①	「サ」を最も多く使用。	デフォルト
	「ネ」の使用数が「サ」の使用数に迫る。	アコモデーション
OFM②	「サ」を最も多く使用。	デフォルト
	「ナ」を 2 番目に多く使用。	アコモデーション
KFM	「ナ」を最も多く使用。	1. アコモデーション 2. わきまえ
KMO	「サ」を最も多く使用。	デフォルト
	「ナ」を 2 番目に多く使用。	アコモデーション
	「ネ」は使用しない。	

4) 同じく香川出身である KMO に対する「ナ」の多用を「わきまえ」によるものとみることもできるかもしれないが、ここでは、他の人に多く使用していた「ネ」を一切用いなかった点もふまえ、対 KMO 場面での「ナ」使用を「アコモデーション」によるものと判断した。

4.2.2. 副詞

表 8 に副詞の使用数を示す。X は使用形式を会話相手によって切り替えているものの、全体的に「ホント（ウニ）」「ホンマ（ニ）」の両方の形式を多く用いていることから、デフォルトの形式は特定できなかった。使用状況をふまえた「結果の概要」と「各形式を選択した動機」は表 9 に示すとおりである。

表 8 副詞の使用状況

場面	対 HFM		対 OFM①		対 OFM②		対 KFM		対 KMO	
話者	X	HFM	X	OFM①	X	OFM②	X	KFM	X	KMO
ホント(ウニ)	7	6	2	3	4	1	0	3	0	4
ホンマ(ニ)	0	0	1	0	2	1	8	5	2	6

表 9 副詞における X の結果概要および形式選択の動機

会話相手	結果概要	動機
HFM	標準語形のみ使用。	1. アコモデーション 2. わきまえ
OFM① OFM②	標準語形をより多く使用。	アコモデーション
KFM KMO	西日本方言形のみ使用。	わきまえ

4.2.3. アスペクト形式

表 10 にアスペクト形式の使用数を示す。アスペクト形式には進行・結果などの用法があるが、ここでは一つの表にまとめた。この表では、シトル、シヨル、ショール・シヨルを「西日本方言形」とし、この使用率もあわせて示す。

表 10 からは、X が西日本方言をデフォルトの形式として普段からよく用いていることが推測できる。これをふまえ、表 11 に結果の概要と各形式を選択した動機を合わせて示す。

表 10 アスペクト形式の使用状況

場面	対 HFM		対 OFM①		対 OFM②		対 KFM		対 KMO	
話者	X	HFM	X	OFM①	X	OFM②	X	KFM	X	KMO
テ(イ)ル	3	7	13	41	2	9	1	13	2	0
トル	7	0	9	1	13	2	8	33	21	16
ヨル	4	0	7	0	16	0	11	9	6	17
ヨール・ヨル	0	0	0	0	8	4	2	0	1	2
西日本方言 使用率 (%)	78.6	0	55.2	2.4	94.6	40	95.6	76.4	93.3	100

使用率は小数点第二位を四捨五入。

表 11 アスペクト形式における X の結果概要および形式選択の動機

会話相手	結果概要	動機
HFM	西日本方言を 8 割近く使用。	デフォルト
OFM①	西日本方言と標準語の使用率が拮抗。	アコモデーション
OFM②	西日本方言を 9 割以上使用。	1. わきまえ 2. デフォルト（主な理由か）
KFM	西日本方言を 9 割以上使用。	1. アコモデーション
KMO		2. わきまえ 3. デフォルト（主な理由か）

4.3. 会話相手によって大きく切り替えたとは言えないが変化が観察された項目(表 5 の②)

X が会話相手によって大きく切り替えたとは言えないが変化が観察された項目は、動詞否定辞、文末の断定辞、断定辞＋接続助詞、推量形式、順接の接続詞、原因・理由の接続助詞、ノダ文の疑問文の文末形式である。以下、順にその結果を示す。

4.3.1. 動詞否定辞

表 12 に動詞否定辞の使用数を、表 13 に結果の概要と各形式を選択した動機を示す。表 12 のとおり、西日本方言形の「ン」がいずれの場面でもよく使用されている。ここから、X が西日本方言「ン」をデフォルトの形式として普段から用いていることが推測できる。

表 12 動詞否定辞の使用状況（過去形・テ形も含む）

場面	対 HFM		対 OFM①		対 OFM②		対 KFM		対 KMO	
話者	X	HFM	X	OFM①	X	OFM②	X	KFM	X	KMO
ナイ	<u>3</u>	22	<u>19</u>	10	<u>2</u>	<u>4</u>	<u>1</u>	8	<u>3</u>	0
ン	23	0	31	<u>8</u>	29	10	14	30	23	21

表 13 動詞否定辞における X の結果概要および形式選択の動機

会話相手	結果概要	動機
HFM	「ン」を最も多く使用	デフォルト
OFM①	「ン」を最も多く使用	1. わきまえ 2. デフォルト（主な理由か）
	「ナイ」の使用率が対他の話者に比べ高い。	アコモデーション
OFM②	「ン」を最も多く使用	1. アコモデーション
KMO		2. わきまえ
KFM		3. デフォルト（主な理由か）

4.3.2. 文末の断定辞

表 14 の文末の断定辞の使用数から、X が「ヤ」をデフォルトの形式として普段からよく用いていることが推測できる。これをふまえ、表 15 に結果の概要と各形式を選択した動機を示す。

類似する方言間のスタイルシフトの分析

表 14 文末の断定辞の使用状況（ノダ文の用例含む）

場面	対 HFM		対 OFM①		対 OFM②		対 KFM		対 KMO	
話者	X	HFM	X	OFM①	X	OFM②	X	KFM	X	KMO
ダ	<u>8</u>	<u>6</u>	<u>5</u>	13	0	<u>4</u>	<u>3</u>	<u>8</u>	1	0
デス	5	82	4	0	2	0	<u>3</u>	4	0	0
ヤ	10	0	14	0	29	3	29	38	25	39
ジャ	0	0	1	0	<u>10</u>	7	2	1	<u>3</u>	0

表 15 文末の断定辞における X の結果概要および形式選択の動機

会話相手	結果概要	動機
HFM	「ヤ」を最も多く使用。	デフォルト
	対他の話者と比べ標準語の使用率が高い。	1. アコモデーション 2. わきまえ
OFM①	「ヤ」を最も多く使用。	1. わきまえ 2. デフォルト（主な理由か）
	対他の話者と比べ標準語の使用率が高い。	アコモデーション
OFM②	「ヤ」を最も多く使用。	1. わきまえ 2. デフォルト（主な理由か）
	ただし、対他の話者と比べ「ジャ」の使用率が高い。	1. アコモデーション 2. わきまえ 3. アイデンティティ表出
KFM	「ヤ」を最も多く使用。	1. アコモデーション
KMO		2. わきまえ 3. デフォルト（主な理由か）

4.3.3. 断定辞＋接続助詞（断定辞に注目）

表 16 に断定辞＋接続助詞の使用数を、表 17 に結果概要と各形式を選択した動機を示す。X は「ヤ＋接続助詞」をデフォルトの形式としてよく用いていることが推測できる（表 16）。

OFM①・OFM②との対話場面において、各 1 回ずつではあるが「ジャ＋接続助詞」が使用された点には注目したい。この使用動機には「アコモデーション」（話し相手の使用に合わせる）と「わきまえ」（岡山方言らしい言い方である）の 2 つに加え、「アイデンティティ表出」があると考えた。岡山での居住経験が比較的長い X が、「ジャ」を使用することで自身と岡山市とのつながりを示したかったとも考えられるためである。以下、結果においてその要因を「アイデンティティ表出」とする箇所があるのはこのような考えに基づく。

表 16 断定辞＋接続助詞の使用状況（ノダ相当表現＋接続助詞の用例も含む）

場面	対 HFM		対 OFM①		対 OFM②		対 KFM		対 KMO	
話者	X	HFM	X	OFM①	X	OFM②	X	KFM	X	KMO
ダ＋接助	0	<u>4</u>	0	14	0	<u>3</u>	0	0	0	0
デス＋接助	0	10	0	0	0	0	0	0	0	0
ジャ＋接助	0	0	<u>1</u>	<u>3</u>	<u>1</u>	9	0	0	0	0
ヤ＋接助	8	0	19	0	20	0	5	36	13	7

表 17 断定辞+接続助詞における X の結果概要および形式選択の動機

会話相手	結果概要	動機
HFM	「ヤ+接続助詞」を最も多く使用。	デフォルト
OFM①	「ヤ+接続助詞」を最も多く使用。	1. わきまえ 2. デフォルト（主な理由か）
OFM②	「ジャ+接続助詞」も各 1 回用いた。	1. アコモデーション 2. わきまえ 3. アイデンティティ表出
KFM	「ヤ+接続助詞」のみ多く使用。	1. アコモデーション
KMO		2. わきまえ 3. デフォルト（主な理由か）

4.3.4. 推量形式

表 18 に推量形式の使用数を、表 19 に結果の概要と各形式を選択した動機を示す。

表 18 から、X が「ヤロー」をデフォルトの形式として普段からよく用いていることが推測できる。これをふまえ、形式選択の動機を推測した（表 19）。

表 18 推量形式の使用状況（ノダ相当表現+推量形式を含む）

場面	対 HFM		対 OFM①		対 OFM②		対 KFM		対 KMO	
話者	X	HFM	X	OFM①	X	OFM②	X	KFM	X	KMO
デショー	0	<u>2</u>	0	<u>2</u>	<u>1</u>	0	<u>1</u>	<u>2</u>	0	0
ダロー	0	7	0	<u>1</u>	0	0	<u>1</u>	0	0	0
ヤロー	7	0	13	0	12	0	5	10	7	8
ジャロー	0	0	<u>1</u>	0	<u>1</u>	3	0	0	0	0
チャロ	<u>1</u>	0	0	0	0	0	0	0	0	0

表 19 推量形式における X の結果概要および形式選択の動機

会話相手	結果概要	動機
HFM	「ヤロー」を最も多く使用。	デフォルト
	福岡市方言「チャロ」を 1 回用いた。	アイデンティティ表出
OFM①	「ヤロー」を最も多く使用。	デフォルト
	「ジャロー」を 1 回用いた。	1. わきまえ 2. アイデンティティ表出
OFM②	「ヤロー」を最も多く使用。	デフォルト
	「ジャロー」を 1 回用いた。	1. アコモデーション 2. わきまえ 3. アイデンティティ表出
KFM	「ヤロー」を最も多く使用。	1. アコモデーション
KMO		2. わきまえ 3. デフォルト（主な理由か）

4.3.5. 順接の接続詞

表 20 に順接の接続詞の使用数を、表 21 に結果の概要と各形式を選択した動機を示す。

表から、X が「デ」をデフォルトの形式として普段からよく用いていることが推測できる。

類似する方言間のスタイルシフトの分析

表 20 順接の接続詞（一部）の使用状況

場面	対 HFM		対 OFM①		対 OFM②		対 KFM		対 KMO	
話者	X	HFM	X	OFM①	X	OFM②	X	KFM	X	KMO
デ	2	1	20	4	9	13	3	31	11	0
ンデ	0	0	1	1	7	0	5	0	5	0
ホンデ	0	0	7	2	5	0	1	2	6	1
ホイデ	0	0	0	0	0	0	0	1	0	29

表 21 順接の接続詞における X の結果概要および形式選択の動機

会話相手	結果概要	動機
HFM	「デ」を最も多く使用。使用数自体少ない。	アコモデーション
OFM①	「デ」を最も多く使用。	1. アコモデーション 2. デフォルト（主な理由か）
OFM②		
KFM	「ンデ」を最も多く使用。「デ」の使用数と拮抗。	X は KFM のスタイルを意識せず、自らがときどき使用するスタイルを若干多く選択したと考えられる。
KMO	「デ」を最も多く使用。	デフォルト

4.3.6. 原因・理由の接続助詞

表 22 に原因・理由の接続助詞の使用数を、表 23 に結果の概要と各形式を選択した動機を示す。永野（1952）より「カラ」と「ノデ」は同じ用法・意味で用いられていると言い切れないが、表 22 では 1 つの表にまとめた。表から、X が「ケン」をデフォルトの形式として普段からよく用いていることが推測できる。

表 22 原因・理由の接続助詞の使用状況

場面	対 HFM		対 OFM①		対 OFM②		対 KFM		対 KMO	
話者	X	HFM	X	OFM①	X	OFM②	X	KFM	X	KMO
カラ	0	9	0	19	0	11	0	17	0	0
ノデ	1	6	1	1	0	0	0	0	0	0
ケン	11	0	11	1	21	9	13	4	21	10

表 23 原因・理由の接続助詞における X の結果概要および形式選択の動機

会話相手	結果概要	動機
HFM	「ケン」を最も多く使用。	デフォルト
	わずかだが「ノデ」も使用。	1. アコモデーション 2. わきまえ
OFM①	「ケン」を最も多く使用。	デフォルト
OFM②	わずかだが「ノデ」も使用。	アコモデーション
KMO	「ケン」のみ用いる。	デフォルト
KFM		

4.3.7. ノダ文の疑問文の文末形式

表 24 にノダ文疑問文文末形式の使用数を、表 25 に結果の概要と各形式を選択した動機を示す。X は全員に対し「ン」を多く使用していることから、「ン」をデフォルトの形式として普段からよく用いていることが推測できる。なお、対 OFM②場面での「ンナ」の使用例は以下である。

- (2) OFM②：どうすンナーみたいな感じで
- (3) OFM②：こっちにこう、どうしてくれるンナみたいなのがきて
- (4) X：どうしてくれるンナゆうて

表 24 ノダ文の疑問文の文末形式の使用状況

場面	対 HFM		対 OFM①		対 OFM②		対 KFM		対 KMO	
話者	X	HFM	X	OFM①	X	OFM②	X	KFM	X	KMO
ト	1	0	0	0	<u>1</u>	0	0	0	0	0
ノ・ノカ	<u>2</u>	0	0	3	0	0	0	0	1	<u>1</u>
ノンカ (イ)	0	0	0	<u>1</u>	0	<u>1</u>	0	0	0	0
ン	6	0	6	<u>1</u>	8	<u>1</u>	6	2	10	14
ンデスカ	0	3	0	0	<u>1</u>	0	0	0	0	0
ンナ	0	0	0	0	<u>1</u>	2	0	0	0	0
ナン	0	0	0	<u>1</u>	<u>1</u>	<u>1</u>	<u>3</u>	<u>1</u>	<u>4</u>	0

表 25 ノダ文の疑問文の文末形式における X の結果概要および形式選択の動機

会話相手	結果概要	動機
HFM	「ン」を最も多く使用	デフォルト
	「ト」を使用	アイデンティティ表出
OFM①	「ン」のみ使用	1. わきまえ 2. デフォルト（主な理由か）
OFM②	「ン」を最も多く使用	1. わきまえ 2. デフォルト（主な理由か）
	「ト」を使用	アイデンティティ表出
KFM	「ン」を最も多く使用	1. アコモデーション
KMO		2. わきまえ 3. デフォルト（主な理由か）

4.4. X が会話相手によって切り替えなかった項目（表 5 の③）

最後に、方言形同士、あるいは方言形と標準語形が異なるため切り替えることも予想されたが実際には切り替えが起こらなかった項目をまとめておこう。X が会話相手によって切り替えなかった項目は、否定の形容詞「ナイ」、原因理由の接続詞、逆接の接続詞・接続助詞である。以下、順にその結果を示す。

4.4.1. 否定の形容詞「ナイ」

X も会話相手も、否定の形容詞について「ナイ」しか用いない。動機として考えられるのは「1. アコモデーション」「2. デフォルト」だが、2 が主な理由かと思われる。

4.4.2. 原因・理由の接続詞

原因・理由の接続詞について X は、相手の使用形式に関わらず、ほぼ「ダケン」しか用いず、スタイルシフトはない。デフォルトの形式を使用したと考えられる。

4.4.3. 逆接の接続詞・接続助詞

逆接の接続詞について X は、相手と選択する形式が異なっても同じでも「デモ」を用いたことから、デフォルトの形式を使用したとみられる。また逆接の接続助詞については、X も会話相手もほぼ「ケド」しか用いない。動機としては「1. アコモデーション」「2. デフォルト」の 2 つが考えられるが、主にデフォルトとして使われているようである。

4.5. 言語項目ごとの分析のまとめ

2.2 節で本論文の問題のありかとして設定した (a-1) を再掲する。

(a-1) インフォーマントは、会話の中で、どのような言語項目をスタイルシフトさせているのか。また、シフトが予想されるにもかかわらずシフトさせない項目があるのか。スタイルシフトさせる／させないのはなぜか。

このことに関連して、4.2 節～4.4 節の分析において、シフトさせる／させない理由として指摘した動機は、デフォルトの形式の選択（自身が日常で用いる形式で話す）、アコモデーション（相手の言語形式に合わせる）、わきまえ（相手の出身・居住地のスタイルに合わせる）、アイデンティティ表出（自らが特定の地域とのつながりをもっていることを示す）に分類した。この動機も含め、4.2 節～4.4 節の分析結果をまとめると表 26・表 27 になる。表 26 は、ヨコに見ると、項目ごとに誰にどの形式を用いたかがわかるように作成している。また表 27 では、そうした形式選択の要因と考えられるものを整理した。表中の記号は形式選択の動機で、それぞれアコモデーション (A)、デフォルト (D)、わきまえ (W)、アイデンティティ表出 (I) を表している。また表においてアルファベットが中黒 (・) で結ばれている場合（表中の※1 など）、当該項目において複数の形式が使用され、それぞれに別個の動機が関わっていると考えられることを表し、スラッシュ (/) で併記されている場合（表中※2 など）、ある一つの形式選択に複数の動機が考えられ、どちらも可能性として排除できないことを表す。なお、併記が括弧書きされている場合（表中※3 など）、可能性としては低い（ ）内の事項も動機として考えられないわけではないことを表す。

たとえば間投助詞の使い分けについていえば、表 27 から、対 HFM 場面での X の形式選択の動機がアコモデーションであることがわかる。対 OFM①、対 KMO 場面での「D (デフォルト)・A (アコモデーション)」は、間投助詞「サ」の使用はデフォルトだが、OFM①に対して 2 番目に多く「ナ」を使用した動機・KMO に対して「ネ」を使用しなかった動機はアコモデーションであるということを示す。対 KFM 場面での「A (アコモデーション) / W (わきまえ)」の場合、動機はアコモデーションの可能性もわきまへの可能性も、その両方が関わっている可能性もある。なお、表において「A (/W)」のように示しているのは、動機としてはアコモデーションの可能性が高く、わきまえである可能性も排除できないが可能性は低いということを表す。

表 26 X と会話相手の主な使用形式

項目	場面	対 HFM		対 OFM①		対 OFM②		対 KFM		対 KMO	
		X	相手	X	相手	X	相手	X	相手	X	相手
①X が会話相手によって切り替えた項目											
間投助詞		ネ		サ	ネ	サ	ナ	ナ		サ	ナ
副詞		標				標	拮抗	方			
アスペクト		方	標	拮抗	標	方	標	方			
②X が会話相手によって大きく切り替えたとは言えないが変化が観察された項目											
動詞否定辞		方	標	方	標	方					
文末断定辞		ヤ	デス	ヤ	ダ	ヤ	ジャ	ヤ			
順接接続詞		デ						ンデ	デ	デ	ホイデ
原因理由接助		ケン	カラ	ケン	カラ	ケン	カラ	ケン	カラ	ケン	
断定辞＋接助		ヤ	デス	ヤ	ダ	ヤ	ジャ	ヤ			
推量形式		ヤロ	ダロ	ヤロ	デショ	ヤロ	ジャロ	ヤロ			
ノダ疑問文末		ン	ンデスカ	ン	ノ・カ	ン	ナ	ン			
③X が会話相手によって切り替えなかった項目											
否定形容詞		ナイ									
原因理由接続		ダケン	ダカラ	ダケン	ダカラ	ダケン	ダカラ	ダケン	ダケン ダカラ	ダケン	ホイダケン
逆接接続詞		デモ								デモ	ホイダクト
逆接接助		ケド									

凡例 「接助」：接続助詞、「標」：標準語形、「方」：方言形

表 27 項目別・場面別に見るXのシフトの動機

項目	場面	対 HFM	対 OFM①	対 OFM②	対 KFM	対 KMO
①X が会話相手によって切り替えた項目						
間投助詞		A	D・A※ ¹		A/W※ ²	D・A
副詞		A/W	A		W	
アスペクト		D	A	D（/W）※ ³	D（/A/W）	
②X が会話相手によって大きく切り替えたとは言えないが変化が観察された項目						
動詞否定辞		D	D（/W）・A	D（/A/W）		
文末断定辞		D・A/W	D（/W）・A	D（/W）・A/W/I	D（/A/W）	
断定辞＋接助		D	D（/W）・A/W/I		D（/A/W）	
推量形式		D・I	D・W/I	D・A/W/I	D（/A/W）	
順接接続詞		A	D（/A）		D	
原因理由接助		D・A/W	D・A	D		
ノダ疑問文末		D・I	D（/W）	D（/W）・I	D（/A/W）	
③X が会話相手によって切り替えなかった項目						
否定形容詞		D（/A）				
原因理由接続		D				
逆接接続詞		D				
逆接接助		D（/A）				

凡例 A：アコモデーション、D：デフォルト、W：わきまえ、I：アイデンティティ表出

次節では、本節の分析結果を踏まえ、それぞれの対話相手に対して X がどのような形式を選択しているか・どのような切り替え行動を行っているかをまとめてみることにしよう。

5. 対者ごとの分析

本節では、2.2 節の問題のありかの (a-2) としてあげた問題、すなわち、以下の問題について分析する。

(a-2) インフォーマントは、それぞれの相手に対して、(a-1) で明らかにしたスタイルシフトを、どのように行うのか／行わないのか。

4 節の表 26 をタテに見ると、X が、会話相手がどのようなスタイルを用いているかによって自身の使用するスタイルを選択している（すなわち、アコモデーションが行われている）項目があることがわかる。たとえば HFM は標準語を主に使用しているが、その場合に X は、他の話者に対してよりも標準語の使用を意識しているとみられる切り替えのあり方を示している。このような観点のもと、会話相手のスタイルを「標準語主流」「西日本方言主流」「中間的スタイル（前二者のいずれでもない場合）」の 3 つにわけると、X のスタイルは次のように整理することができる。

1. 会話相手が標準語話者（HFM・OFM①）である場合

一部の項目において、普段のスタイルである「高松市方言でも福岡市方言でも使用される形式をベースとする西日本広域方言」を標準語に切り替えたり、切り替えようとした。ちなみに西日本の出身でもなく居住者でもない標準語話者の HFM よりも、西日本出身・居住者で標準語使用者の OFM①に対してのほうが標準語スタイルに合わせようとする傾向が強い項目があるが（たとえばアスペクトや動詞否定辞など）、その理由としては、HFM が義妹、OFM①は友人であることから親疎関係に影響された、即ち、義妹に対しては相手のスタイルに合わせずとも心的距離が近いと思っており、友人に対してはスタイルシフトすることで相手との心的距離を縮めようとしているという可能性が指摘できる。

2. 会話相手が西日本方言話者（KFM、KM0）である場合

表 26 の KFM、KM0 の欄をタテに見るとわかるように、X はこの 2 名に対してはデフォルトの形式選択が多い。会話相手が X 自身のデフォルトである形式と同じ形式を使用する相手には、予想されるとおり、X も自分の普段のスタイルである「高松市方言でも福岡市方言でも使用される形式をベースとする西日本広域方言」を用いて話す。スタイルシフトする意識は低いと推測される。

3. 会話相手が上記 1、2 のいずれでもない（OFM②）場合

西日本方言と標準語がまざった中間的なスタイルを用いる OFM②に対して X は主に「高松市方言でも福岡市方言でも使用される形式をベースとする西日本広域方言」を用いて話した。それは、OFM②は実際には中間的なスタイルの話者であるものの X にとっては西日本方言話者であるというイメージが強いこと、X にとっては OFM②の標準語の使用実態が、標準語への切り替えの意識付けとなる頻度や項目に該当しなかったことが理由として考えられる。

また、対者ごとの切り替えは、会話相手がどの地域の出身・居住者であるかによって決まることもある。たとえば、相手が岡山県出身・居住者である場合は、岡山市方言に特徴的な文末断定辞「ジャ」の使用頻度が増えたり、他の話者に使用しなかった断定辞+接続助詞「ジ

ャ+接続助詞」、推量形式「ジャロー」を使用したりした。この理由の一つとしては過去に岡山に居住していたという自らのアイデンティティを表出し、相手との心的距離を縮めようとしている可能性が考えられる。

さらに、HFM に対して、わずかであるがノダ文の疑問文の文末形式として福岡市方言「ト」、推量形式として福岡市方言「チャロ」を用いている点も興味深い。この要因としては、(ア) 義妹が X のことを「福岡在住の義姉」として認識していることを無意識に感じとり、標準語を用いて話すより福岡在住者としてのアイデンティティを表出するような言葉遣いで振る舞うのが適切だと感じているから、(イ) 義妹と話す際に標準語を使用すると心的距離が広がると X は感じている一方で、方言を用いたほうが親しみを持ってもらえる／話しやすい雰囲気につながると X が感じているから、の 2 つの理由が考えられる。

6. 考察

以上、インフォーマント X のスタイルシフト行動について、4 節で言語項目ごとの、5 節で対者ごとの実態およびその動機を考察してきた。本節では、これらの結果を踏まえ、問題のありかとして設定した、以下の 2 つの問題を考察する。

(b) 問題のありか (a) として設定したスタイルシフトの実態を踏まえれば、インフォーマントは、総体として、どのような動機でスタイルシフトさせる／させないのか。

(c) 得られた結果の中で、特に西日本で移住を行った話者に特徴的な事象はなにか。

6.1 節で (b) について、6.2 節で (c) について考察する。

6.1. 切り替えの動機

問題のありか (b) について見ていく。X は、言語能力として、もっとも能力レベルの高い「西日本広域方言」と、個別要素からなる「高松方言 (= 高松市方言)」「広島方言 (= 広島市方言)」「岡山方言 (= 岡山市方言)」「福岡方言 (= 福岡市方言)」「標準語」の 5 つの言語システムをもっているとみられる。結果をモデル化すると図 1~4 のようになる。図では、X のもつ言語システムを、水をはったバケツの中に (条件に応じて) 浮き沈みするボールが入っている様子になぞらえて示した。ボールの大きさは X の言語能力の高さに比例している。水面に浮かんでいるのが実際の場面において表出される言語システムであり、2 つ以上のボールが浮かんでいる場合は言語システムが混在していることを表す。

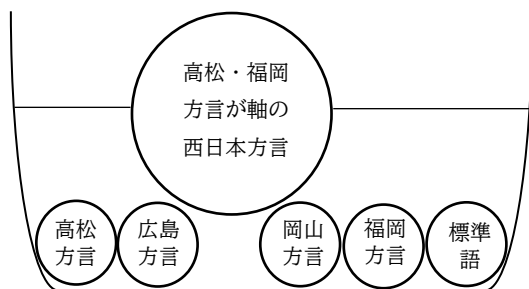


図1 デフォルトの形式を選択

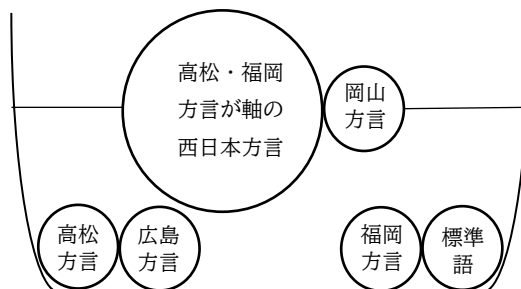


図2 OFM①・OFM②との会話の一部

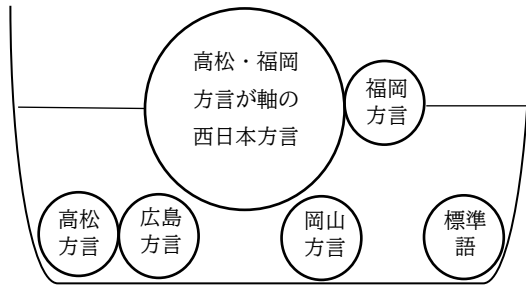


図3 HFM との会話の一部

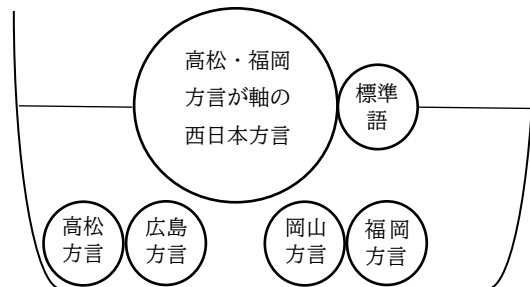


図4 HFM・OFM①との会話の一部

Xの言語使用においては、特段の動機（アコモデーション、わきまえ、アイデンティティ表出）がなければ水面に浮かんでいる西日本広域方言（デフォルト）が使用される。これが図1の状態である。特段の動機があれば、バケツの底にあるいずれかのシステム（の要素）が浮上し、西日本方言にプラスの要素として、あるいは混じって使用される（図2～4）。どのシステムが浮上するかは、会話相手、言語項目、動機の種類による。たとえば図2はOFM①、OFM②に対してXの岡山市方言に特徴的な文末断定辞「ジャ」、断定辞＋接続助詞「ジャ＋接続助詞」、推量形式「ジャロー」の使用頻度が増えていたことに対応する。図3はHFMに対してノダ文疑問文の文末形式「ト」と推量形式「チャロ」を用いたことをモデル化している。図4はHFM、OFM①に対して副詞、アスペクトなどで標準語の使用率が上がっていたことに対応するモデル図である。

6.2. 西日本出身および西日本内移住者に特徴的な事象

ここでは問題のありか(c)について見ていく。全体の結果とXの居住歴から、Xは主に「高松市方言でも福岡市方言でも使用される形式をベースとする西日本広域方言」を話していることがわかる。Xの中にはデフォルトの形式として、この西日本広域方言が中心にストックされていてXはこのスタイルを普段最もよく使用しており、アクセスしやすい領域にストックされていると考えられる。

本研究では、当初、宇田（2017）や上林（2019）のように、会話相手によって、ある程度統一的な傾向（関西の同郷の友人には関西方言、他郷の友人には標準語など）がより多くの項目でよりはっきり観察されると予想していたが、実態は異なった。Xの特徴は以下のようにまとめられる。

- ・ 「高松市方言でも福岡市方言でも使用される形式をベースとする西日本広域方言」のデフォルト形式がある。
- ・ Xのスタイルシフトは、そのデフォルトに加えて個別の要素（方言）を使用することによって現れる。

この2つの特徴には、以下6つの理由が考えられる。

- ① Xがこれまで居住してきた地域が言語的距離の近い範囲内であるため、切り替えができない（特に高松市と福岡市は共通の形式を使用するなど切り替える形式が存在しない）。

- ② 特定の地域への帰属意識が X にないため、各地域の方言習得が中途半端になっている。
- ③ (ア) 生まれ育った香川県を離れて生活している期間が長くなった。(イ) 義母や元職場の上司から「讃岐弁を避けるように」という趣旨の指摘を受けたことにより、幼少期に身に付けた高松市方言を話さなくなった。(ア)(イ)の結果、高松市方言の記憶が曖昧になった。
- ④ X が人生の中で最も長く居住している福岡で接する相手の中に伝統的な福岡市方言を用いる人が少なく、伝統的な福岡市方言を覚えることもなかった。
- ⑤ 学校教育・マスメディア・アナウンススクール等で身に付けた標準語を知識として持っていて使うこともできるが、親しい人物とのカジュアルな会話場面であるため、標準語話者を相手に標準語のみを使うことはなく、西日本方言をベースとして用いた。
- ⑥ ただし相手によって、自らがこれまでに習得したり触れたりした方言の特徴を用いてアイデンティティを表出させることもある(例: OFM①・OFM②への岡山市方言の使用、HFM への複数項目における福岡市方言の使用)。

以上が西日本で移住を行ったインフォーマント X に特徴的な事象である。

7. まとめと今後の課題

以上、本論文では西日本で 3 回の移住経験を持つ一人のインフォーマント X を対象に、親しい人物と会話する際、母方言・移住先方言、あるいは方言・標準語をどのように切り替えるのか、あるいは切り替えないのか観察し、インフォーマントの中で複数の方言と標準語がどのように運用されているのか分析した。いくつかの項目における切り替えの状況から、スタイルシフトの実態を明らかにし、考察した結果、次のようなことが分かった。

まず、言語形式面では、全体的に、

- A) X は、デフォルトの形式である「高松市方言でも福岡市方言でも使用される形式をベースとする西日本広域方言」を主に用いて会話している。X の中にはこの西日本方言が中心にストックされ、このスタイルを普段よく使用しており、アクセスしやすい領域にストックされている。

次に会話相手の属性という観点から見ると、

- B) X は、標準語話者に対し、一部の項目において標準語スタイルに合わせる／合わせようとする傾向が見られた。ただし、西日本の出身でもなく居住者でもない人よりも西日本出身・居住者でありながら標準語を使用する者に対してのほうがスタイルを合わせようとする傾向が見られる項目があった。
- C) 西日本方言と標準語がまざった中間的スタイルを用いる会話相手に対して X は主に「高松市方言でも福岡市方言でも使用される形式をベースとする西日本広域方言」を用いて話した。
- D) X は、自分と同郷の者と話す際は主に自分の普段のスタイルである「高松市方言でも福岡市方言でも使用される形式をベースとする西日本広域方言」を用いて話す。

また、切り替えの動機という点から見ると、

- E) 動機が【①アコモデーション（およびその可能性）、②わきまへの可能性（およびその可能性）】である場合にはXが会話相手によってスタイルシフトした。
- F) 動機が【①アコモデーション（およびその可能性）、②わきまへの可能性、③アイデンティティ表出（およびその可能性）】である場合にはXが会話相手によって大きく切り替えたとは言えないが変化が観察された。

なお、EとFの違いは、「アイデンティティ表出」である。アイデンティティ表出のためには、以下記載のHの通り、ある地域に特徴的な方言の表現を部分的に用いるが、最も多く使用する形式（スタイル）を切り替えることはない。

- G) 動機が主に【日常でよく使用するデフォルトの形式をそのまま選択した（およびその可能性）】である場合にはXが会話相手によってスタイルシフトしなかった。
- H) 動機がアイデンティティ表出である場合には、Xは、相手が岡山出身・居住者には「高松市方言でも福岡市方言でも使用される形式をベースとする西日本広域方言」に加え自分の中にストックしている岡山市方言を少しだけ使用する。また、西日本の出身でもなく居住者でもない人に福岡市方言のノダ文の疑問文の文末形式「ト」と推量形式「チャロ」を用いて、自らが福岡在住者であるアイデンティティを示そうとしたり、あえて方言を用いて相手との心的距離を縮めようとしたりした可能性がある。

以上のような特徴が現れるのはやはり、Xが言語獲得期を過ぎて中四国・九州北部地方という狭い範囲内で移住したことが関係している。各地域に共通する言語形式があり、第二・第三の方言獲得が比較的容易ではあったものの、各地方言の特徴的な表現を必ずしも普段から用いているわけではなく、当該地域の人や自分がアイデンティティを示したい相手との会話場面でストックされている領域にアクセスし、想起され、使用に至るのである。

一方、本論文では次のようなことが課題として残された。

- (a) スタイルシフトした・しなかったが変化が見られた・しなかったことについて、それぞれの要因の候補を示すことはできたが、絞り込むことはできなかった。
- (b) 同じ会話相手に対して、形式選択の動機が、「この項目ではアコモデーション、この項目ではわきまへ」などと変化するのをどう解釈するのか、なぜなのか（Xの中でどのようなことが起こっているのか）に迫ることができなかった。
- (c) 時間経過によるスタイルシフトの実態を明らかにできていない。
- (d) Xはアクセント・イントネーションでもスタイルシフトしているように思われ、分析を試みたが、結果として明らかにできなかった。

今後、上記4点を中心にスタイルシフトの実態と要因についてさらなる調査・分析を進めることが課題である。

【参考文献】

井出祥子（2006）『わきまへの語用論』pp.100-119, 大修館書店。

宇佐美まゆみ（2015）「日本語の『スタイル』にかかわる研究の概観と展望—日本語会話におけ

- るスピーチレベルシフトに関する研究を中心に」『社会言語科学』18-1, pp.7-22, 社会言語科学会.
- 宇田萌美 (2017)「母方言・移住先方言・標準語のスタイルシフトの実態」『阪大社会言語学研究ノート』15, pp.1-21, 大阪大学大学院文学研究科社会言語学研究室.
- 岡実咲 (2018)「岡山方言の aspekto に関する研究—シトルへの一本化に伴うショールのムード化について—」『岡山大学国語研究』32, pp.13-25, 岡山大学教育学部国語研究会.
- 乙武香里 (2019)「香川県高松市方言」方言文法研究会編『全国方言文法辞典資料集(5) 活用体系(4)』pp.73-87, 科研費報告書.
- 上林葵 (2019)『関西若年層のカジュアル談話にみるスタイルの運用—首都圏移住者を事例として—』2019 (令和元) 年度大阪大学大学院博士学位申請論文 (未公刊) .
- 工藤真由美 (1998)「西日本諸方言の aspekto 体系の記述をめぐって—中間報告と今後の課題—」『日本語研究』18, pp.1-11, 東京都立大学.
- 国立国語研究所編 (1989~2006)『方言文法全国地図第1集~第6集』(いずれも国立国語研究所 Web サイト: 2021 年 11 月 13 日閲覧. https://www2.ninjal.ac.jp/hogen/dp/gaj-pdf/gaj-pdf_index.html)
- 小西いずみ (2017)「広島県三次市方言」方言文法研究会編『全国方言文法辞典資料集(3) 活用体系(2)』pp.115-126, 科研費報告書.
- 小島祐将 (2017)「岡山県岡山市方言」方言文法研究会編『全国方言文法辞典資料集(3) 活用体系(2)』pp.105-114, 科研費報告書.
- 高木千恵 (2006)『関西若年層の話しことばにみる言語変化の諸相』(『阪大日本語研究 別冊 2』) 大阪大学大学院文学研究科日本語学講座.
- ロング, ダニエル (1990)「大阪と京都で生活する他地方出身者の方言受容の違い」『国語學』162, pp.12-25, 国語学会.
- 永野賢 (1952)「『から』と『ので』とはどう違うか」『国語と国文学』29-2. (服部四郎他編 1979『日本の言語学 第4巻 文法Ⅱ』所収。本論文は後者によった。)
- 温井孝誠 (1997)「移住における言語変化—十津川村出身者の調査資料をもとに—」『地域言語』9, pp.27-43, 天理・地域言語研究会.
- 平塚雄亮 (2014)「福岡県福岡市方言」方言文法研究会編『全国方言文法辞典資料集(2) 活用体系』pp.125-134, 科研費報告書.
- 松丸真大 (2010)「方言話者のスタイル切換え」『日本語学』29-14, pp.142-152, 明治書院.

【辞書類】

- 『日本大百科全書』Japan Knowledge Lib からアクセス, 小学館.
- 『デジタル大辞泉』Japan Knowledge Lib からアクセス, 小学館.